



13 録
門号 五
459
卷 95

消
福
赤

重修真書太閤記十編卷之十三

金子傳兵衛尉二度勇戦の事

并五十路井内匠より使者の事

松山の副将栗山将監親継末名太郎兵衛元實の軍
不意に起り大將久武内藏助を助くる事能く其
上み城中の兵士五万余人ありやう討死手負八
千餘人及ぶると時の運よる事云やう將た
るの罪と認められん小辭をへと詞をへされと
由栗山末名の武勇万人を勝せしもの事よ小早
川の手と討破り切抜く小高さ処よ打上り皆紅よ

后
會
印
攻

大開記十編卷十三

月出たる旗おたて敗軍と集めけるは爰う
栗山衆名力と得此勢と以て松山と一責をゆとや
とおのひしうへやの腰兵糧と開いて息と繼馬よ
草飼木蔭と下居て汗とあさ何の口より攻入んと
思案しける処へ坂崎喜八郎たらし一騎を求り高
尾の城主金子傳兵衛ハ吉川元長と攻破られ終
高尾よこへ松山さして落来る道とて
たゞく加藤清正の侍よ石井兵藏とつゝめめ久武
内藏助と生捕馬と縛り付て山道と越るは行合
うの傳兵衛石井と討取久武と助け本國より彌三

即殿後詰とておとすもばなる御陣へ参向
手よなりて當所へ寄んととるより承りて此處
御旗と立ちしと見請ひへの告知を奉るなり
るゆゑ各も彌三郎殿と一手よなりてあひてのち
松山との御責ひて然るは加藤小早川吉川の
つゝも勝りて然も大勢なり味方の氣化つれ
て小勢なり懸合の軍いなるも敗軍の辱と
雪ゆんため無謀の合戦と身と失ひ主君と損と
取せんとうへも然るはと申とて元
來し道へ引返と栗山衆名と聞坂崎のつゝめ
實あは我等この勢とて城と攻んと謀あ

さよ似たり一刻も早く引取て彌三郎殿の御陣頭
へ参上し御下知と請て城と責るとも遅うし
つとよも犬死の無益なるべしと決着し兩人打つ
れ足とろめめて退たりける又加藤小早川の両将
の松山の城に入處々の火と消し打毀たる堀石垣
櫓あとの透間と塹と築を爰と根城とて四國
と切平くべしと評定しその討取し首級と改め味
方の手負と療治し勲功の高下と調へ内大臣殿の
御許へ注進し此氣ふ乗し土佐國すきたる一時
亂入とて軍の評議し終らざる處へ飯田
覺兵衛大汗より来てを來り石井兵藏久武内藏

助と生捕りてを歸る處へ高尾の城主金子傳兵衛
來合を石井と討破り久武と接奪ひ長曾我部信親
の陣へ走入りしより定て信親と共に當城へ寄
るみて有へくは御用心いへくと注進しその上信
親押えよ置として森本齋藤加藤清兵衛の手心元
なるとして當手の軍兵追々駈向ひいたる大將あ
くして各々の進退如何いへん早御出陣にて御差
引これあるべしと申ける處へ小早川の家臣清
水長三郎より來り松山の栗山將監衆名太郎兵
衛敗軍と集め一万とありしと土列の後援彌三郎
信親と一手とて引返しゆくと覺い石橋八郎右衛

門二千余人と取切可申とい存ゆへ共軍とこふ
 る難義たるもくゆ猶御勢と加えり然るもくゆ
 とつひ捨すめぬ馬ふ打のりて馳りける加藤小
 早川此由と聞松山の城より両家の勢一万五千余
 人と残り置加藤清正一万餘人小早川隆景二万余
 人取のりも取あへん急て進發をせりけり石橋八
 郎右衛門門に二千餘人より土佐勢と留留んため柵
 結逆茂木引て切所より待り居たる所へ金子傳兵
 衛久武内藏助熊谷四郎左衛門以下五百余人面も
 あらび切てりしに加藤の手より庄林隼人赤星
 太郎兵衛三千餘人小早川の加勢五千餘人金子と

討取高名よとんと石橋り後より大浪の岩よあこ
 りて碎くる風情しととさよなく切りける又長曾
 我部彌三郎信親の松山加勢のこめ出勢したる上
 へ一刻もゆるゆ城下より馳着上方勢と攻破り日頃
 の手並と顯るさんと備と固め人数と押けるよ松
 山の方より當り火の手上り黒烟天と焦り又関の聲
 ふこぞよ響きそむびたき聞えけりしに皆へ松
 山落城をよや心元なりと身とめも悶しうとも
 深夜といひ山道のことあといせんうこなく夜の明
 ると待居たりける夜とそよ明くる頃松山へ
 押詰て見ると城はとや落ちて久武も栗山業名もあ

けりて何と勝とも負とも見ともさうこくあり
 ける処へ金子傳兵衛熊谷四郎左衛門久武内藏助
 とを來り面もあつて突けたり加藤石橋肝と潰
 一敵は新手に加らうつとも小勢なり勇わつと
 も只三人を追取りめて討て取やとのみよきと鶴
 翼よそあつて責うると金子久武魚鱗み列ぬて
 うけ合を開つ合つ電光石火追つとこれ戦ひけ
 ると見て熊谷四郎左衛門尉このむ所の太身の鎧

逸物なり乗人の四國第一の馬のうなり列飛一突
 落し阿修羅王の荒たる如く豎横十文字巴の字よ
 めくるへ土州方植松藤兵衛尉飯田傳左衛門宮本
 角藏のつとも劣らば續きたとい金子久武まむく
 勢と増陰よ閉まの陽よ開ま石橋と三度合ての三
 度別と右よめくまの左よめく獅子の子の牡丹
 の花よたぐむまの如く追あひひ追めくる熊谷
 へ石橋と目よけつ石橋のまの熊谷と打取んと
 互よ見交し大音あけ小早川殿の御内なる石橋と
 のと見たるの僻目うまの四國よ名と得し熊谷

けり見参さんと聲うけて例の長身と以て只一突
 ぶと突うけしう石橋う肩のこつとやうつこと突
 突とて石橋馬より落との熊谷う侍共走よりて首
 を取大将をてよ討れたとの此手のさてやふしけ
 り久武の加藤う備へ切て入火花とちりく責た
 たりよ加藤う手よの庄林赤星木村井上金子と討
 んと進もうり長曾我部信親の旗本勢とらう出
 打とも切ともてくをば前なる死骸と踏越くめ
 ら叫んととめ戦ふ栗山衆名今そらうり一時節也
 うもさやうもとと聲々々言りく進むと見て土州
 勢あしう一人もあくまへ山や崩とて流とけ

ん石や碎て飛散し蜂の起るもうとちり信親真
 先よ進て手とたろし四尺よ余る大太刀と打あり
 打あり難たつとに加藤う手ののめめてあまし忽
 一筋の道と開さけるよと金子十死と出て一主と
 得たり森本赤星庄林一手ふなり今追幾度の戦場
 と経たるとも今日のとちり開かると軍ふ出合
 してあをさうりつとさそ熊谷の能武士よあは体
 の侍も又あるへとあのかさし敵ありうもと褒
 つる処へ衆名栗山う一万余人関の聲と作りうけ
 て進まけると見て清正あはし松山と取りへさん
 と働くめのも其心しく城際へあはるなと下知し

けいせいへのつとも其意と得て防と戦へとも衆名栗
 山案内の知たり手痛く責付しうへ清正勢終りう
 ろり松山へ引返りあの時清正隆景二万余騎よ
 て馳來信親も無二無三ふ切りへと本ありり
 けるよりの信親軍とよめ金子熊谷久武と一つ
 ろり勝関作りて引返し柵をあり陣と堅くして
 手負とつこり討死と数あるよとへて五百余人
 過さうけり信親諸將よ向ひ五十路井徳居り不
 忠ふりう三城と失ひつとも久武金子熊谷
 三人の忠義へ今日と顯れつとも厚くおれと
 賞しつと討死とつもの妻子とい懇ふつこり

給ふ大将の仁愛とりあつとぬ人どおの愛
 り松山の城より五十路井兄弟徳居刑部り忍の使
 来りて書翰と呈し其詞ふ
 五十路井内匠同兵庫徳居刑部謹言此度上方勢
 四國へ向ふよりの請手とつと諸大将多し中よ
 り御撰よ預り三津濱道後西處押の備被仰付中
 國勢と防留る処加藤小早川吉川三家之軍勢も
 被責付討死と定め必死よなりて深入仕り加藤
 之手に内匠生捕と罷成ひ因て清正之陣中之次
 第内大臣秀吉之軍立大形見知仕い阿波讃岐之
 西國も既り内大臣之手よ降参ひ只今之内早被

運御勘辨御和睦之義御取結い事長曾我部家
万全之御計策と奉存い然上ハ土州之義更ニ無
別義条清正以誓紙申聞い是等之趣厚御思慮之
上被及洩達い様所希い恐惶謹言

天正十三年乙酉五月十八日

徳居刑部

五十路井内面

姫倉九郎兵衛

五十路井兵庫

久武内藏助殿

金子傳兵衛尉殿

此狀披露及ひ彌三郎信親より返り
熟覽の上諸將より向ひ此義如何あること面々の
異見と聞その上より土州へ申遣り元親の意と
伺ふことなりとつとていり満座つとて口と
閉てののつとて熊谷四郎左衛門尉なりて朱の如
く怒りて眼と涙とよりうけて申げり不忠不義の
五十路井兄弟徳居刑部等より書翰取手も穢る心
地しくいりゆく使者より引出しその首切てその狀
とハ寸々より引裂て返遣りいといと席と叩
て言うしうとも信親のことゆりていぬハ四郎
左衛門尉も大息繼て扣えたり

流布本此狀の辭冗長重複して聞えりぬる処多
く且長曾我部太郎殿とあり長曾我部太郎とい
ふ人なり彌三郎信親のことなりとてさうか
三人より信親へ直に充てさ様なり因て一本
従ふ

や、ありて栗山將監席と進み信親に向て申ける
へ熊谷の申条一ころり尤よ然しなりとて五十路
井内通加藤の手へ生捕とてその陣中よ在とあり
へ清正の陣中の容子と探り知りんよの味方の
為に究竟の事あり又秀吉の意中と知りんよも
内通以下三人ののの探らとひとて詳しとらる

つ、ゆををれの内通以下三人の使節と切といん
んとの敵と損なり味方よ害多くいへ如何と
申ふ三人の者より使者とて越の事恐ひとて
申のの決して清正も隆景も知て然とてと申
つる上のことよいへ然とて此使の三人より恐ひ
の使と申ととも實に清正隆景の使とありゆ
いへ因て此使と斬といひゆの清正隆景と別の
根とて申いへ是斬まよと道理よい次は和
睦の事はよ能々御勘辨ありとて富方の四國
悉く打從へていと申ととも實に土列とて御
と重代の御國なり其餘の新參當參ののよ御

勢も多しといへとも十万の上は多うさうさう
秀吉の勢は今初と百万も及ひいへしそれゆと
の大軍と率ひなうう十分の一も當る當方と和睦
せんとのらるる心底と計りおのふも能も土州の
引矢と奥深く恐ろしくおのふれいと覺えいたと
つに此國と悉く攻めいへん追々人数を増と
たし然しこのちよ切勝いても南海のくそなり船
路の往來たやとうう秀吉の内者とさう知
して此國と治めんよ治め課とさやのあや知
うと長曾我部の威光はてり増うとい是和睦の御

恥ありぬ処とありめとア殿の御心よも始
終秀吉と弓矢と取とあて必定勝アと思召い
かうん愚らなる我等式う心よ二十勝とあふ
かへとい存をいひ弓矢取身の意地よていへん大
軍と以て向ふアといしれいと聞とこのま軍
いおとろしくい鬼も角く仰よ從ひいへとい申
とまよ一旦の城よあめり野よ戦あてその後よ
と和睦と取結ふとよていあも上方勢と切崩
その後と追つ渡海して都まても切上らふとい
のよのの實ふりて然このなるくさゆ然しこの
御和睦ありて土州一國と安堵あることなまじり

大開言一編卷一三

御恥辱と申へども此義も御賢慮あるべく存いと
申ひては信親聞あふて何とも仰らば久武内藏
助座と立て栗山側居り申ける其の
くも御眼鏡と以て松山の城と預けらば身敵
よりあつと生捕と馬の上へ搦めらばと
おろひなる金子とあり御蔭よて此御陣中へ列座
とることを得たは何とも申へどもいねとも久
武の名字ふ付て父祖の心とたしむりいよ秀吉
の軍立あり元人の及ふ処とおのれに應仁よ
り以來こゝにたりと世と太平ふ浴むるため
くる人と天照大神の御心よて世よ出されしめ

とおのえい其上ふ此人の申さるる天子と尊ひ
民と安く高買の道と開と世と安穩よと下知を
られいと誰ういあしと申へく軍といあを
多く人と殺ととあのみ降るとゆきて疑ふ
とや末代不思議の大将あるへく我等生捕と
いと搦めらばいと手荒くいをばいと
て馬の上ふありなり本陣よつと直よ首と
列るふるといあのを五十路井内通ととも
さあといひつらん然に此度へ使者よ下り
引出物賜る内近へ能々御思慮ありとのち重
ねて是より御申あると由御返事ありて然る

くいと申けるを金子傳兵衛とて出申けるは何
さま栗山久武両処のいんも旨趣と傍よく勘辨
つとゆる和睦のうご可然と仰らるるよ其ふ
との心よも寄手と切拂ひ追崩し其跡よ付て渡海
し都ぞと押上り内大臣と打てとて當方よて天下
の執柄となりゆる實よ目出度事なりと只今寄
來りゆめの計よゆる我等手よても切盡し申
へくゆへとも敵ハ日よま勢うさるゆ故今日千
人討るると明日ハ二千人と渡りゆ味方ハ一人討
死とれハ一人減し更よ増へるとたよりは是一つ
の難義よゆ次よ切勝渡海ハとへくゆ不知案内の

國々なりとそれと從へんとま二川の難義よゆ次
よ我等ハ人と殺しと身と立家と起し榮耀と極む
へとの本意あり敵ハ人と殺しと好まは世と安
くをとゆふと名とハ人心よ於て何とと戴とい
らんゆといえハ敵よ伏るゆの我國よと多く
ゆゆらんや敵の國よ於てをゆ秀吉の心此國と切
平け長曾我部の御家と斷絶をしゆんとおのるこ
るこの此書状よと明白よゆ今一應敵の心よとる
り見て其模様よとる万事御計ハあるゆ存ゆ就
てハ御返書然とへくゆと申進めしゆと信親よ
も打點頭せむハ然ハその使らととと呼出され

太刀馬おと賜らる返書とらるる

重修真書太問記十編卷之十三終

重修真書太問記十編卷之十四

吉川小早川長曾我部信親合戦の事

并金子傳兵衛軍の事

加藤小早川一所に打寄て去り休息しつゝ清正
隆景も向ひ五十路井兄弟徳居以下降参のめの共
此度の軍の景氣より心うらやまのつるうとおわ
えひ小早川殿の何と御覽しゆかと申されけり
隆景もうち點頭むひつらも明察ある御眼曲
尺うみ然の御邊の松山へ引返し彼四人を引こけ
請手と替隠目付と置あふアと異見あうける

大開言一終卷三
大開言一終卷一四

より清正松山へ引返しそれより手當とせしむ
其後吉川小早川の両勢二万五千余人川と前と當
上下と陣と取四國勢も同じく備と立ち川邊五六
町ハ馬の懸場と残りたり吉川勢の川下ハ栗山
將監と先陣と久武内藏助と大将とせしむ八千
餘人小早川の手ハ栗名太郎兵衛を先陣とせし
吉良播磨守と大将とせしむ一万餘人ハ焼山の
城預りあるら加勢のこめと來りしより總大将ハ
長曾我部彌三郎信親一万三千餘人金子傳兵衛ハ
二千餘人と引率して遊軍たり都合三万餘人なり
然るに栗名太郎兵衛の先手本山左近人より先へ

手柄とせんと三百餘人との川と渡して小早川
の陣へ切てりし小早川の先鋒井上九郎右衛門
志村五郎兵衛と見えて堤の陰に鉄炮とあを本
山より先陣と目と掛打立しる左近の手ののせ
人よりしをりくと打倒さる井上と見えて目も
あびど本山と突りしる本山よりしるひん九郎右
衛門より突出を穂先を請損とあえはく戦死したり
けと吉川勢のしる氣と得て我もくと押渡す中ハ
も山形空之助鎗と取て栗山より陣へ突入たり栗山
ハ味方と進めと戦ふ処へ吉川より手より扱原彌八
郎例の十三貫の鉄の棒を打りし責りしるし

りて衆名栗山の手の者足とて敗走は栗山
將監とて返をくといひれとも引立たる勢
のくをゆれへ耳も更に入を右往左往と亂
けるうち栗山も討とて大将彌三郎信親ハ味
方の敗軍とて五六町引下り廣野陣を丸く備
へ右の方より金子傳兵衛旗本と弓手見せ
扣えたり是ハ吉川小早川勝とのうて爰迄追來ら
へ引包て無二の一戦をと計りたり然とも目
早さ小早川隆景引螺をあらとて人数を引擧んと
ひ然る石谷兵部くくつり勝りたる軍と
引退といふ法ある我もつつけと云まると短兵

急進んころ隆景も是とて何さば掛て見よ
若の共と下知あは井上九郎右衛門志村五郎
兵衛尤右より鎗をまと作りて突くは長曾
我部彌三郎信親旗本勢と三段より鳥雲の陣と
うて待うけたり信親その日の出立ハ唐綾緘の鎧
小蛇皮の甲と著栗毛の馬の疾鬼と名付て九寸
余の逸物金覆輪の鞍と置朽葉の厚總うけ金の
折敷の前立ののへうとて四尺はあま
る大太刀と真向よこし群うり立たる井上
九郎左衛門う勢の中へあめのとくる其形勢大
象の波と披さ猛席の林と出るありさよもうくや

と見え花々信親ありと見てしうの井上り勢
こも前後左右より打てくるると信親見るあり面
倒ありののくしわとつみまうし五六騎切ておと
し鏢元すて血よそと太刀と袖あるしとさ
と拭ひあても進んと戦ふと井上九郎左衛門馬り
けを花あらし八重さうう句も深き御大将一鎗
参りいとつみあり早く十文字の長徳の鎗真直中
と繰出とと信親とつと見て慮外あるとや九郎左
衛門罷退けとつみまうし四尺二寸備前長義ら打
たる新身めて真向微塵と只一打りてうんと
反りへり馬より下へ落たるると馬驚りて列上り胸

のあさうとまうしうと就たりしうとその儘息の
絶てけり大将とて討としうの井上り勢の四方
へ散亂を志村五郎兵衛らるうと見て井上り敵を
うのうとまうしと切てくる信親推参至極の田舎
武士とふと退あし聲うけつと拂切と切とて志村
も太刀と打落されあし叶うと寄り組んと聲うけ
て信親の馬とおしあうしと見と志村を中へ
引つらと泥田の中へ真逆さまふ投込と死生の知
とありしけり是と軍のうしめると信親の前より
くるもの身と全くするのちうりけり小早川の旗
本よりあつ若武者よとこの多く討とてうりあ

ト打止井上志村ウ供養よをんと聲ウけあうウ駈
出ると誰あうんと見ウへまの山田作太郎とて六
尺七寸の大兵ありかハ八十人カとつへともた
めは五十人の腕ありとせよ聞えさる荒男より
の棒の一丈さうりなるを八角に削り筋鉄あり
と打ありし黒革緘の大荒目あり毛の三枚兜を
猪首ふ著あり月毛の馬の八寸に餘さるる打のり
同一物となるのものと撰て三十餘騎馬とてしらす
大音上をよよ渡らをかふハ長曾我部殿と見奉る
僻目う是ハ小早川の侍よ山田總左衛門尉ウ嫡子
同名作太郎生年廿一歳見參をとんと呼らぬハ信親

馬と乗出し小早川ウ侍の分よと信親よ物つらん
とハ過さあり如何かとい馬あり下て禮をよと但
今迄我手よりけし侍の容子を知らう進こ来る
うめよゆけよ命ハ汝よ預ぞとゆきて作太郎
馬ウけよを例の棒よを一打と打てりつと身を
くさし空を打をて口惜ゆと齒噉をふしつと横よ
拂つハ身を沈まし七八十合氣よめまを然して後
よ汝を打つと太刀ハ持し形大さく馬よ似たり
馬よハ是ろを相應ありめと大口あので打笑ハ四
尺ありの鉄の鞭ありあくるうと見よハ作太郎
顔の構とよと打て頬骨折て目くるめさたち

ろく処と帖掛ちつきまゝ一打看いちうちけんと打うて馬うまより落おとせ
起おきも立たひゆるり蹄ひづめよりけられてあられむア一
山田作太郎俯伏うつぶするりて死してけり信親のぶちか山田の捧ま
と取とて向むふとさらうりに叩たたき立たていやまらうり二に三三
十人打倒うちたされその餘あまの共秋ともあきの嵐あらしの木の葉のと
吹かけ如ごとくもて小早川こぞがわの本陣ほんじんへ駈入かけいり九衛門督殿くわゑもんくつゑんハ
のつくよあらい隆景たかかげぬいのあらいと堅横たてよこ十
文字もじよ乗破のりやぶりけいと隆景たかかげもりる荒物あらいものよ折合せあて
詮しふしと引下ひして隠かくさしと信親のぶちかもゆくも目めより
けてそれい隠かくさしへ小早川こぞがわ殿とのあらいへいさらうりか
も後のちと見みをあらいのりか長曾我部元親ながそがべのちかの嫡子ちやくし

彌三郎信親やみさぶろのぶちか敵たかも取とて不足いそくよ非あしと件の棒ぼうと
軽々と打振うちて進すすむりるりと小早川こぞがわの旗本はたもと亂みだれ
たら信親のぶちかと目めよりけ切きてうくるりと已等いとううり際ぎに
て彌三郎やみさぶろと打止うちどめりとあらいりて此棒このぼうを參ま
らをとんと云いふり早く續つけ打うちて打うちていは六む七しち騎き
あらいり頭かぶあらいり腰車こしぐるまうち碎くだして倒たおしけり此
間まに隆景たかかげハ終はりして出會いひ信親のぶちかの跡あとより吉
良播磨守よしか東名あづな太郎兵衛たろうべゑ久武内藏助くぶちざんすけ真黒まぐろといひりて
切きりり小早川こぞがわ陣じんハさて崩くづれりといひ吉川元長よしかわのちかと
を掛かけ四國勢しこくせいの大將軍たいしやうとあらいり漏もれりかと下知したち
しりけりと何なにも大將たいしやうと打取うちとめりと進すすむ所ところへ金子傳かねつた

兵衛二千餘人と六角ふふ面もあつて討入たり爰
ハ山形空助も手なうけるを散々打破りしうハ
空助も叶らんと勢をまゝとめて側より金子心
かく我を誘引とてや悟り二千餘人と一文子よ立
て吉川も旗本へ無手とくく吉川元長ハ中國よ
勝とて若大将あり金子傳兵衛ハ四國第一の兵法
者孫呉も機密ハ心よあり打物取てハ九郎判官鬼
一も傳えし奥義も極め得たりし達人なり土砂
と蹴たて塵埃を飛し死せる親とも躍り越倒る
兄とハ推除て千騎の一騎なるも引あひり
しと取しめ合天も響く鐸の音鳴雷と驚りし地を

踏とくろり馬の蹄ハ篠と衝雨も混る計り庶
人の目と醒し追つ返しの戦ふ処へ金子も隊
なる熊谷四郎左衛門尉好む処の長身の鎗を以て
突立つと立掛入たどハ松原彌八郎あしと見付ハ
りも熊谷殿高尾も討満たり今日ハ脱さ
覺悟あしとよとつふも鉄の棒を打あり真向微
塵と打ちもと熊谷鎗も突拂ひ六七合も及
ふ処へ長曾我部彌三郎金子熊谷もや疲とつら
ん信親もあしとあり能をもや勞とたつハ一引引
氣と養へ跡ハ彌三郎も請取んとくく聲ハ百
万の加勢もあしとて熊谷ハ勢猛く突出ハ鎗も杖

原看先とあつてつらつと突止しつらつと鞍またまらば真
逆さまらば落ると見るも熊谷り又一鎗とけり
と枚原り即等とも走寄看とゆけりぞ引退く金
子へ鞍上り立上り吉川小早川と打破る今ぞ真
小時るどゆ進めくと諸手とゆけり追討し討や
うと下知しける折しも長曾我部彌三郎吉川元
長と弓杖二三段と出合たり彌三郎莞尔と笑ひ吉
川殿り信親ありと名乗うけて追うくれハ元長ハ
長曾我部と戦ふて勝りてとやあゆめぬらん前
なる川へ打入向の岸へ打上り味方と進めて戦を
しむ實も大将の器量ゆと感さぬのゆをなかり

けは斯て其日も暮れ及ひ互に退て息を継軍ハ今
日み限るゆと長曾我部ハ勝関つくり陣と取
諸卒と休息さすゆと西川も松山の城外に帷幕
と張て人馬と鎮む

金子傳兵衛智謀の事

并吉川勢夜討の事

西川と中國にて沙汰と名將なりとも長曾我部
彌三郎信親り虎の如く龍の如く猛勢と挫りて敗
走をしも全く信親一人の功よあはれ金子傳兵衛
能時と知熊谷四郎左衛門尉り武勇絶論たるよ
因りとして信親厚く是と賞美し著替のためとて持

をたりし鎧と二領取出して二人と與え二人の功
へその是士卒の能其指揮に従ふり故なりとて二
千餘人へ満貶せし酒肴と賜りてあはれと犒られ
けり然るも人ありて二千餘人のうちよのこくま
て働さしめのもあるべく又少も功あるも有へさ
ののと言けるを信親聞てつゆ尤もあはれ壁ハ
人の体の如き右手と左の手とい用の便不便もあ
り去として右手をうりよていその便も便ありば左
手不便ありとも又右手は勝る時もあり前ハ用あ
りとも後ハ用なり然とて前のこの人もあはれ後と
棄し例もなき我眼をてられハ有功も無功も同一

く戰場に出て同一く引たどるに同一と云但有功の
ののよ下戸あるべく無功のののよ上戸あるを
是あを面々の果報ありとやといわれうハ人さあ
其心の穩しく士と愛するとの厚さと知つるはも
つづも此君のためは捨ん命ハおしうと彌
勇氣と勵まし明日の軍と持とある意のうちあ
そたのめけし金子ハ今年五十歳數度の軍は高
名と重祿うさるる古兵ありそれと伴ある熊谷四
郎左衛門年ハ四十ふ近けしと妻と娶らる女は馴
ば明ても暮ても山狩川獵海に入てハ二日三日も
休ふる息の長けしハ息長の四郎左とも又熊谷の

息長と世よのてとあさる男あり抑元親初ハ小
 身なりしうとも今ハ四國と十分切あひけ打從
 つて剛勇の諸士と撰て三十二人あはハ四々十六
 方よ二人つて分配つふなりあの外阿波よハ谷忠
 兵衛讚岐よハ細川源九衛門つとも弓矢と取て
 心剛よ然も義烈のめの共なるとハ内大臣秀吉公の
 差向あハ猛將銳士と引請て少も屈をばささるひ
 とど數月の間の取合ハ東國北國中國よ類ひまれ
 ひの軍なり中も今日の合戦よ討取首ハ四百余
 級川へ追込討とりのハ數も知は浮名と四方
 流しけり味方よ於て討とりのハ百三十餘人

手負へ二百余人ととあれハ軍の記録とて本國へ
 注進ありける処うくて信親申されけるハ此上ハ
 松山取うへハ加藤吉川小早川と追返とへハ方便
 の諸將の意見聞まるといれハ金子傳
 兵衛進と出て申様軍よ主客の差別あり昔ハ我々
 主ありしう今ハ我等ハ客とある土地の案内知
 たよハいふ攻め味方ハうとて守る敵こそ
 易りしめ因て思ふよ向陣を取又足溜の砦とりま
 へ終よ陣とも砦とも敵よとて驕らをとての
 ちよ誘引出して入替へハ謀るをもうるらめ人
 人如何よ思召よやといえハ信親大よ悦ひ夫あを

實^い然^らく^もけ^し早^さ々^さ用^{よう}意^いより^しど^かと^て若^わの^普
請^{いん}夜^や晝^{しゅう}い^その^金子^しら^軍配^{はい}嚴^{えん}重^{じゅう}に^警衛^{ゑい}更^まに^怠ら^ず
士^し卒^{そつ}と^督して^備え^{けり}叔^{しやく}ま^と吉^{きち}川^{がわ}小^こ早^さ川^{がわ}陣^{じん}に
て^ハ手^て負^おと^療治^ちし^討死^しの^交名^な記^きして^功と^褒し^無
功^{こう}と^賤し^評定^{てい}の^処へ^清正^{せい}出^{しゅつ}城^{じやう}あり^内大^{だい}臣^{しん}殿^{でん}の^陣
代^{だい}と^云と^以て^上座^{じやう}に^著先^{せん}刻^{こく}の^合戰^{せん}難^{なん}義^ぎあり^とハ
見^み請^{せい}い^へとも^我の^出城^{しゅつじやう}して^援ひ^參ら^{せんと}し
て^吾を^ばハ^付入^いる^入と^めや^{せん}と^存い^まり^城
と^守り^て出^{しゅつ}申^{しん}さ^ば近^{ちん}頃^{くわん}本^{ほん}意^いに^いま^らば^但長^{ぢやう}曾^{そう}我^が部^ぶ
猛^{まう}勇^{ゆう}の^若將^{じやう}に^しと^いま^らる^安く^いへ^{とも}金^{きん}子^し傳^{でん}
兵^{へい}衛^{ゑい}年^{ねん}た^ける^思慮^{しよ}深^{しん}し^輕々^{けい}敷^し軍^{ぐん}仕^しま^らんと^如何^が

と^存い^まり^と申^まけ^ると^小早^さ川^{がわ}ハ^同心^{どうしん}あり^て清^{せい}正^{せい}の^心
中^{ちゆう}た^のめ^いく^いと^いま^られ^かとも^吉川^{がわ}ハ^亦ら^ま
不^ふ平^{へい}の^氣色^{しき}ハ^見え^ぬや^り小^こ早^さ川^{がわ}の^氣ハ^さら^ら
と^とと^同く^畏て^いま^らる^請を^反申^ませ^れたり^併
元^{げん}長^{ぢやう}一^{いつ}人^{にん}我^が陣^{ぢん}に^かへ^ふと^其の^まに^清正^{せい}の^いま^られ^し
し^処ハ^至極^{ごく}の^上策^{さく}あり^へけ^しとも^某存^{ぞん}を^子細^{しゆ}
何^{なに}れ^ハ今^{いま}宵^よ一^{いつ}夜^や伐^{ばつ}して^當國^{たうこく}の^めの^生肝^{せいかん}を^抜め^し
へ^しと^おの^り我^がと^おの^り人^{びと}々^々ハ^同心^{どうしん}
お^れや^とい^まら^れか^ハ誰^{たれ}か^ハ一^{いつ}人^{にん}止^とま^らへ^し中^{ちゆう}ハ
由^{よし}杉^{すぎ}原^{はら}彌^や八^{はち}郎^{らう}ハ^熊谷^{こや}ハ^突れ^し瘡^{かさ}ハ^まに^痛は^{よく}
難^{なん}義^ぎあり^しと^由事^じと^もせ^し直^{ちやく}ハ^打立^たんと^しと^もあり^け

る哉見て有地左近いゆれよも叔父君并は加藤殿
の軍令又付玉ふ事御父元春公の思召も叶せ
玉ふへ〜と申志るとも元長とらみ聞入以その夜
もとや成の刻杉原彌八郎や手の者三百余人衆名
太郎兵衛も堀切へ埋草をかけ入〜して山田總
六一番鎗と名衆て衆込ハ直み小屋へ火を掛たり
元長ハ火の手を見るより無二無三又攻や〜しけ
るろ土列勢の砦ニヶ所を打取それより又武も備
み攻や〜しけるみ又武下知して弓鉄炮をき間か
く打出し防戦もさるる急形ける処も小早川加
藤の陣処もてハ火の手みおどろき去り何事と物

見をい〜これを見をいハ吉川も夜討勝利を得
〜と聞清正小早川大又敵の謀も落入と取れ早
く乗取〜陣城を焼きて〜早々引取ハ〜と申遣
志るとも吉川更又聞入も小早川隆景これをして
いそぎ吉川も陣もせ行吉川を伴ひハ〜へ〜
とて我陣の備をやく〜神速も馳行けるも只今
軍真最中とお不〜弓鉄炮の音をひ〜聞え〜
ハ隆景大も驚きこハ一大事も及ひたり者とも
續けと逆散もせたりける

重修真書大隆記十編卷之十四終

大岡記十編卷十四

大岡記十編卷十四
吉川元長拔縣難戰の事
并長曾我部信親勇戦兩川敗軍の事
吉川駿河守元春の嫡子元長の叔父隆景并加藤
清正の意見よも戻り一身の勇氣と以て拔懸の夜
討となり土州勢の謀とも心付バニヶ処の砦と乘
取り久武内藏助陣城より寄直子斯處と由
打破り猶も進んで吉良播磨守陣と打て掛らん
とこころ処へ小早川左衛門督隆景馳付吉川元長と
對面し隆景申さるるは日頃の武勇と知たるう

重修真書太閤記十編卷之十五

吉川元長拔縣難戰の事

并長曾我部信親勇戦兩川敗軍の事

吉川駿河守元春の嫡子元長の叔父隆景并加藤
清正の意見よも戻り一身の勇氣と以て拔懸の夜
討となり土州勢の謀とも心付バニヶ処の砦と乘
取り久武内藏助陣城より寄直子斯處と由
打破り猶も進んで吉良播磨守陣と打て掛らん
とこころ処へ小早川左衛門督隆景馳付吉川元長と
對面し隆景申さるるは日頃の武勇と知たるう

へい今日の手柄珍敷くことつへとも三處の敵陣と打破くこと近き例と聞え莫大の勲功と申べし但内大臣殿の陣代たる加藤清正り制したる捷と破りしこといりも殘念なり如何をへく思われゆや定めて内大臣殿より何と仰下さるへくめめて返答の旨趣と案し置とあるへくは元長の意いりよどやとありし吉川されい加藤殿の軍令よりいへとも敵陣の容子實は打破とつへく見受ゆより夜よまされ人数と小々さし向てい全以て元長罷向ひゆあは敵の謀よめゆらんとの御疑ひ御尤も承りゆさりいあり

ら退て愚案とめくらゆよこのと恐ろしと謀もあるよりさうと思われゆ小早川殿も態と是まで御出張の上元長跡と御黒め賜らゆいへと實は余義なく申されし隆景志し打案し加藤の制し法令と破りゆとい元長も我等も同一ことゆ元長軍法と破りゆとて御勘當あるへく隆景何とて脱し申べきより叔父甥一処も御勘當りゆ可申なりと同意をうけるあをうこてけし加藤清正此も聞より大に驚きとをゆ一大事となりよなり清正向を叶ふしと松山の留守と大夫に定め置我身へ忍ひて出張し見

吉川元長思慮淺く小早川後援の力を得兩
川の勢一万三千餘騎松原彌八郎と先鋒と吉良
播磨守と合戦是とも散々打破り今いふ四
國勢恐るるは是ともおのひしうの深く
長曾我部彌三郎信親うさうの金子傳兵衛と打
取んといさゝ進みける又信親の兩川の勢をおの
ふ圖は釣付たり時いふはとちと小高き山よの
り相圖の小旗とありひらめくや久武内藏助
第一番ふ取てうさうの岩と砕くる磯波の渚よの
は譬へていふは岩と砕くる磯波の渚よの
るよとも似たり吉川元長うち誇りてうさう

とへ思ひも掛ど一所は打寄一息つとさう油
断の処あるは踏直しく揉合たり小早川へうさ
そのや有んをうんと兼て心よりけつと敵是不
とも強まへといふおのひさや打ともひるまは突
ともおのび峯より落る大磐石の尾上と轉るもや
くやらん兩川の勢ありく持あましてぞ見えたり
けり然とも隆景世は聞えし老功の大將あれは揉
立揉立繰りく切処は備えて支へんと一足二
足より引退ると見ては四國勢をく軍は勝と
むとあくと責めや若の共そこを透たは物頭
衆とうさうさうて責たてらと兩川の旗本らと

色付と見ゆゆのる吉良播磨守一万余人潮の満
 る如く押つめさる兩川のいよこのゆ是は驚きと
 りうよせむと後を見よの相圖の鉄炮二三發う
 ち放しつゝ関の聲とつくりうけ西の方より本
 山將監三千餘騎東の方より石谷兵部三千餘騎金
 子傳兵衛五千餘騎丑寅の方より本井彈正二千餘
 騎辰巳の方より近澤嘉兵衛五千餘騎南の方より
 池野左近右衛門五千餘騎兩川の間と取切松山勢
 の援と絶んと掛しうの流石の隆景もあされを
 嗚呼長曾我部元親う追軍慮は賢しうるへこと
 へ思ふさうしなり隆景のむ術は盡たり此上の

運と天は任をて切破り再度工夫と疑し今日
 恥と雪ひアとと指折りうめ僅は二時さうりと
 踏らさく敵も變の出来るあゝん味方よも又
 加勢あるへさぞと諸手下知しと働け元長血
 眼より我加藤殿の法令と破り叔父の意見は戻
 うと敵の謀は陥りたり生て人よ面とあをせうこ
 一今日ぞ我戦死の時刻なりとて真先は進すれと
 う四國勢の聲々よ黒筆おと一の割子机同一毛の
 五枚甲は月毛の馬心はくめぬ鏡鞍それあを大
 將吉川よ駿河守の嫡子よと今そ日の出の大將を
 と千騎万騎よする人のうを余を心して同

いへ生捕よせよと呼らりて近付と元長聞て敵
まうく追見知し上へ彌道とぬ処なり敷心よこ
すひと吉川の名字と汚をも口惜と一本の松を小
楯取五人張り十三束さし誥引つめ射あふ弓
の元より中国よりの上手なり真木上野女口訣
と傳へ本間孫四郎資氏の流しを依藤太の的傳
正統なりと矢當精は空矢なく忽十八九人と射落
一むひ一程は四國勢も少く白けて見えさうけり
矢種盡しは今は是追そいて最期の軍なりと
敷仕て見をとんと云ふは三尺八寸三原鍛冶の新
刀よりて刃廣は見ゆると打あかり石谷の手は掛

入蛇手結果十文字は切破り巴の字となりて駈め
くれは面と向る人もなく中を関りて通りけり吉
川得たりと駈抜て我勢と見ると八百餘騎は打
さる此勢も駈破りつへいとも引後とたる
勢とも集め敵の意とも引見ると小高岡に
打上り九曜の星の旗ありたて暫時息を繼居たる
と見て石谷久武双方より透間もよく切てり
元長あしと見て天晴敵は元長死出三途の御先
仕つとと言うは三尺八寸の大太刀打あり向ふ
ののどは切て落し横あるとへ拂ひ切堅は進むを
へ胴切は切て棄たる働は世に珍敷見えよけり山

手のうごよみ杖の原彌八郎大勢は取うとすれ雍
 つ雍とつ上段下段間あうとも見えさうけり元
 長見りつて一援をひて得さんと金剛力
 士の荒たる如くす輪寶の山と崩をよ似て一瞬
 もとび四國勢の其内は近澤嘉兵衛う後へ廻りと
 つと叫ひて突うる其勢を譬てつと堤の水と
 切又似て目さすふんと愚なり杖原も元長と
 見ゆる又一人の氣と増て奮ひ戦ひけるものと
 四國勢と別を備と立る其程は元長杖原打は
 して吉川勢の其中へ走入り息継まるの馬の首
 と立直し四國勢の渦巻たる楯のとき間と見討ひ

駟散さんとすける處へ吉良播磨守一千餘人と
 引分て押寄たり元長杖原あう少も休らふべ
 左右よりして切結ふ元長主従の太刀風は吉
 良播磨守切すられて敗走ひ其跡へ長曾我部彌
 三郎信親旗本と整々と操出し元長は向ふ元長杖
 原馬と一処に立て望む所の敵より一足も引か引
 くとたしあめ合双方相近とて一矢射違ふ程み
 そあし入るこれ入交り鋒より火と出しを戦ふ
 信親左右とをくめ是を聞ふる吉川元長は敵も
 敵とすのの能と少も油断とる厳敷下知
 して打圍む吉川の少勢なり其上は今朝の勞

兵也信親の荒手は碎れて八百餘騎も大形うこ
 せ今へはつうよ十七八騎に成りけり元長鎧踏を
 う立上り此勢は實に一騎當千を然らぬ猶も軍の
 ぞぐりうけりてこそ隆景も何とやうあひ
 しどや行衛へ覺束ふけりて是と尋ねる暇の無
 そやと云つて又引返り信親に廻り合討死せんと
 切掛とも信親の勢はまじく加らうて寄付へく
 もあつたこれの名もなす者と切死せんも願はら
 らば然らば一子の落ても見んと前なる川へ馬と打
 入水中よと志す息を継げる其処へ落散り吉川
 勢より馳聚り百余騎にたりけり隆景へ金子傳

兵衛に切立られ實は危く見え共老練の大
 将ふれに終る切脱篠山と云小高岡に打上り
 楯突て居られける金子も是と追さうけるよ
 う隆景も敗軍を集め又千餘騎にたりけると見
 て金子隊の熊谷四郎左衛門山と取巻四方あり
 切上らんとやあう隆景下知し弓鉄炮と嚴敷
 うととけるよあう熊谷も案に相違やたりける
 山下扣えて屯とやと信親ふれと見て五千餘騎と
 引分金子に力と合せんと馳來り熊谷の後より切
 うとこれとも村上刑部小泉左衛門大夫より戦
 めて高名をり吉川元長もあう関の聲を聞是の

必定小早川殿の手の戦急なりとわのゆるそつて
 掛向ふて横箭射んと下知しつゝ百餘騎と左右に
 立元長真先進を旋風の如く塵を立て馳立ると
 熊谷金子勢と二川とむむと押合火花を散して戦
 ひける中ふ吉川方有地尤近此軍然るくうと
 諫めつとも元長聞入を終るく成行しを今ぞ
 我言當とうと手柄顔を生たらん云甲斐ありと
 むのひしる信親の手を走向ひ手と碎つて戦ふ
 たり信親見むひあとの吉川侍有地とのゆめ
 のよ中國名と得侍り生捕よと穴うと
 傷つくるとあをそと下知たりうの四國勢四

方より追取圍て操合けるゆと馬驚つて刎上り
 飛廻るつと主も落馬して乗直さんとすけ
 る処へ四國勢折るさなりて遂にあれを虜るその
 のち金子謀て元長と隆景陣と篠山へ追上一
 手となし二人一同に打取んと備を開きしあり
 元長も隆景の屯を山上へ走登る隆景元長と見
 て味方とす王薬も盡くたり防く術もあ
 此上への山上と自害とす越王勾踐の會
 誓のひりしもうとたわめたり

加藤清正加勢の事
 并両川對陣小早川智計の事

加藤虎之助清正ハ小早川の注進と聞と其儘三千
餘騎と引分ひきわて松山城と出とて二里ありも來
るにける矢叫やひ鉄炮てつぱうの音鯨波くじなみはくくるとい聲列こゑは
く聞えけしとて戦最中と覺えさう進めくと下
知しけるさあり先陣ハ飯田覺兵衛森本儀太夫二
陣ハ木村又藏井上大九郎三陣ハ齋藤立本庄林隼
人四陣ハ赤星太郎兵衛鶴平次五陣ハ清正の旗本
なり但たゞあの五手の中と又五手ごて組くみ分ぶんとて廿五
手てとあるふれと真丸まゐ備そなへ信親のぶちかの陣の後のちより峰
の子この起おこり立たち如ごとく無二無三むにむさん切崩きりやぶたり金子
傳兵衛のぶへいやくと見みるあり大旗おほしほと振動ふるごし只今援來たすける

勢せいハ鬼おに神かみかと沙汰さたをある加藤清正かとうせいせいあるぞ内大
臣殿ちんぜんの陣代ちんぢあり心こころして戦いくさへや油斷あぶらちきを流ながすと
下知げちしけし承うけりぬと應こたへて討うてうると清正
急度きゅうどとさうとて大文字おほなごの旗はたハ四國しこく名なと得えし
金子傳兵衛かねこでんべいあり自余しよごの業武者わざむしやと同おなしうう此手
一川切崩いっせんきりやぶハ四國勢しこくせいハいふと足あしび進めくと下
知しける采配さいはいを打うちけりあり何なにとも劣せらハ
馳掛ちかけと之間のまなく責せまつめたり金子かねこふれと見てあえ
と大將おほしやうやふれと射落あやさんと情なさけふふとさうとて今日
ハ戰場せんじやうあり脱だつとてさうとああと弓ゆみあつと矢打
番ばんひさうくと引ひ誥ごう弦音げんおん高く切きてさうと誤あやり清

六月己一編卷一五

正う乗たる馬の平首も中どの馬類もさね狂ひけ
 るるありさげらの清正も馬より落ると土佐國の
 住人有井又左衛門とて万夫不當の若武士ありけ
 る一鞭あてて走り寄真向一打と切りさたり
 清正もさね見ぬりて片手も馬の手綱を取
 片手も矢と後籠と呼付瘡の淺さを随分つて
 止とて本陣へうへへける處へ木村又藏より來
 う何ののなれい我君へ手向さると其の馬もさ
 と呼くれい又左衛門馬の望み任とて其報答よ
 汝う主の首と取んとつと聞も終らび又藏之上
 うて又左衛門と中へ引はうとてとてとてとて
 投打んとて

ると見て清正その馬も乗あう駿足なる此馬得
 さとて謝禮とて命さううへ助もつとつと聞又
 藏さんい本あり殺さぬ覺悟もいといひあう弓
 杖六七丈投たれい射向の板も脇腹と損し起も
 上らび死しとけり此と軍のさめとて申刻とて
 る頃手と追たて追つめ戦あさう清正へ新しかり
 土佐勢へ今朝もりの軍も勞きたり金子あり時と
 こらるる妙ありさうの信親と勧めて操引も引退
 くと吉川小早川得たりと追掛りとも熊谷四郎
 左衛門尉後ううと取て返し能戦ひけるさうり
 両川も清正も今へ是追なりと勝鬨作りて引返

女隆記一級卷十五

手負死人と改むるよし吉川方より名を知り侍
十二人雑兵千八百余人討死し手負は二千餘人
及ひ小早川の手の侍廿人雑兵九百餘人討死し手負
千百余人加藤の手より手負百三十余人有り
四國勢より手負討死相應あり引りとも上
方より比ふれは半より至らばあり後互は夜
討の用心さひひし鳴子と引折木とうち編木とを
うろとひし何事も過しけりその翌日
信親の陣へ讚岐高松の細川源左衛門許より早
馬來り注進しけるは黒田官兵衛浮田七郎兵衛以
下數万余騎渡海して當城とてさむと以の外急

依て其由と土州へ注進するとも阿波國
への手當と隙の故援兵延引し及ふと云り然
らば當城の落去且夕とをまういたし一手の
軍勢より共讚岐援兵と號して出張ゆる城中の
氣力より振ひ申へくは尤も土州より加勢到
著りて當城のちあくらるるは信親諸將より向ひ
早御出張專一よりと申せしるは信親諸將より向ひ
此國の合戦へ我其意を得たり金子傳兵衛熊谷四
郎左衛門以下残り居て留守をらるるは我旗本の
勢とて讚州へ發向し細川と援ふるは金子以下何
も各此義と心得るありしるは金子以下何

仰せご間ふ我々御留守仕るアと申けるよ
う金子傳兵衛と總大将としく吉良播磨守兼名太
郎兵衛以下三万五千余人と以て若々の柵逆茂木
と嚴重よりゆく對陣の用意と厚くして豫州に殘
し置信親の旗本一隊三千余人讃岐とさして發向
け跡より金子傳兵衛諸大将に向ひ某不肖の身
ととも總大将の命と受たり併短才愚盲の某あれ
と守るべき謀と知とい面々の意見と承り申度い
と申志うの吉良兼名以下つらとも異口同音に答
へける御年臘と申是迄の御軍功金子殿の御習
練といひ我々あるとの及ひい事は無之何事ともわ

御差圖よりの奔走仕るべくいと申て更な嫉妬
偏執の色あうりけこの傳兵衛大に悦ひ味方の人
々如是く和親をうり上り屋形の幸福と申へく
面々勝軍の瑞みてゆ尤いり敵つらゆうよあいら
ひい共決して取合ふまゝいと申てそれらうの
ちの陣々の用心のそ嚴重よりて更な合戦をいと
むとあり此に於て松山城中より退屈しけるよ
清正申されける土州勢遠巻を巻て更な合戦を
挑むといひあのみよ阿波讃岐のうへ金子り又
の信親加勢としく發向ありけるよ但りの
如く遠巻よりして上方への通路も塞うり始

終難義あり如何とていふことありし隆景
申けり此間西伊豫の發向大洲宇和嶋を攻
取つてあり如何とありけり清正尤然と
くと同心即日西伊豫へ進發あり

重修真書太閤記十編卷之十五 終

